

山カガシの話（二話） = = = 三州横山話より

昇天する蛇

山カガシは天に昇ると言います。また山カガシの、軀が太くどす黒い奴は能無しで、引き締まった軀の、赤色の勝った蛇が、昇るのだとも言います。

〔昇ったのではなかろうかと言う噺〕大正四年の夏、横山の近藤福太郎という男が、早川明という当時一三歳の少年と二人で、字仲平の桑畑の中で桑を摘んでいると、傍の桑の木へ、小さな山カガシが梢に近くなると、軀の重さで梢が曲がるのに、落っこちては登って行き、登っては落ちしていたそうですが、ふと眼を他へそらした間に、その蛇が皆目知れなくなったので、二人してあたりを探したそうですが、ついに見つからなかったと言いました。あまり不思議ゆえ、天に昇ったのではなかろうかと言っていました。よく晴れた日の、午後二時頃だったと言います。

三河に近い、遠江の引佐郡井伊谷村〔現、引佐町〕のジグジというところの、ジグン寺という寺の門前に、六月、田植の人たちが雨やどりしていると、門前にある大きな桑の木に、山カガシの赤く輝くような奴が巻きついて、篠突く夕立の中に、じっと頭を空に向けていたと言いますが、その人たちが、あの蛇は何をしているのかと、不思議がって、何だか先刻より思うと、蛇の頭が少し長くなったようだと、囁き言ううち、ふっと眼を他にそらしたか、と思う瞬間、そこに居合したものの眼にも、蛇の行くえがさらに知れなくなったと、その中の一人の女が、私の母に話したのを聞きました。

〔昇ったのを実見した話〕名前は今記憶していませんが、私の母方の祖母の従弟で、八名郡下川村字下条という村へ、婿養子に行った男が、夏、畑に出て綿を採っていると、傍へ小さな山カガシが来て、空に向かって高く頸をあげているので、不思議に思って、仕事の手を休めて視ていると、その蛇が、尾をぶるぶると顫かせたと思う間に、するする空に向かって昇って行くので、驚いて附近に働いている人たちを呼び集め、蛇がだんだん高く昇って最後にひらひらと小さく見えなくなるまで、見物したと言いました。その日は空に雲一つない、よく晴れた日であったと言います。その男が祖母に話したのを聞きましたが、同じ男が、そこそこで幾度もそのことを物語ったと言います。

引越して行った蛇

横山の字池代、柳久保というところの田の畔に、山カガシの大きい奴がいるとは、私の祖父の若い頃からの言い伝えだそうです。私の父なども、毎年二、三回はかならず見かけたと言いました。大蛇と言うほどではないが、長さが二間ほどあったと言います。草刈に行つて見たものの話には、草むらの中に長く

なっているので、蛇のいるまわりだけ草を刈り残して、他の部分を刈っていると、蛇がいつか刈り取った方へ引き移っているのです、後から残したところを刈ったと言います。その蛇がここ二〇年来見えないのは、あまり躯が大きくなったので、どこか深山へ引越したのだろうと言いましたが、その後、村の山口伊久という男が、近くの山で藤蔓を採っていて見た蛇が、それだろろうと言いましたが、それ以後は、見かけたことを聞きません。

私の家の前の石垣に、毎年秋の彼岸頃に姿を見せる、三疋一つがいたという、山カガシがありました。これが近年どこかへ引越したのか、いなくなったそうです。だいぶ遠方まで遊んで歩くと見えて、沢を越して五、六町も隔たった場所に遊んでいるのを見たことがありました。